

「どうも」「どうやら」「なんとなく」について

— 川端康成の小説を対象として —

陳 連 浚

はじめに

日本語の副詞の中で、特殊なものとして存在しているのはいわゆる陳述の副詞の類であろう。時枝誠記が陳述の副詞を「極めて異例に属するもの」(注1)とされているのはこのためである。例えば、永尾章曹氏が指摘されているように、陳述の副詞は、いわゆる副詞と、いわゆる連体詞のうちで、それが、いわゆる陳述の段階にかかるものであるという点で特殊であると考えられるのではあるまいか。また、陳述の段階が、叙述の文節としてあるものの、表現主体とかわる地位を言い定めるものであるとすると、この点でも特殊であると考えられるのではあるまいか。何かに就いて、就いて言うものそれ自体を言い定める他のばあいに比べて、特殊であると考えられるようである。

(『国語表現法研究』328頁より)

しかし、陳述の副詞といわれる陳述の段階(注2)との間ではどのように関わっているのか、これは残されている課題であろう。

本稿では、陳述の副詞と文の陳述の段階との係わりを究明する一段階として、「どうも」「どうやら」「なんとなく」を対象に、その呼応する表現の実態について検討をしようと思う。それから、呼応する表現との意味的な相関関係から、その特徴を考えてみる。テキストには、新潮社刊行の『川端康成全集』を用いた。

一 「どうも」

「どうも」の例文は全部で二五九例ある。その中で、「どうもすみませんでした」「どうもかうもありやしないわ」などの慣用表現は一〇三例ある。それは固定的な用法で、陳述の副詞としての用法とは違うものと思われるので、今回の考察の対象外とする。その他の一五六例を対象として、その呼応す

る表現の違いによって分類をすると、次のようである。

一・一 「どうも」と呼応する表現

「ゝ気がする」(全部で四例)

1 それがじわじわとしまして、素直にしてゐると、そのまま死にさうな恐怖で、弓子は思はず、助けを呼んでゐた。

「田部先生、早く来てちやうだい。」と、どうも、昭男に救ひを求めたやうな気がする。そこどころが、夢がさめてからは、はつきりしなかつた。(十五『東京の人』434)

2 これは原稿か。手紙か。楽書か。

老人はどうも手紙のやうな気がするので、高原療養所の歌子のことを思ひ、胸ふさがりながら、そつと原稿紙の奥に隠した。(二十三『花の潮』203)

例1で使われた「どうも」は「気がする」と呼応するもので、表現主体の「弓子」は、夢の中で自分の行動に対する感じを表わしている。例2では、正体は何であるか、確認していないものに対して、「手紙」であると、「老人」の感じを表わしている。

「ゝようだ」(全部で九例)

3 野口は眠りにくい夜を白馬の幻に救はれて、もう何年になるだらう。その幻の白馬の姿は生き生きとあざやかだが、乗つてゐるのはどうも黒衣の女のやうであつた。

桃色の服の女の子ではない。(一『白馬』529)

4 俊三は女中に、注射器を煮沸消毒させたらしく、ひとりでビタミン剤のアンブルを切つて、ひとり注射をすませた。

そして、ワイシャツを着た。いらいらしてゐて、ネクタイがうまく結べない。どうも曲つてゐるやうだ。

去年あたりまで、敬子は俊三のネクタイの結び目を指でちよつと直すのが、習はしだつた。(十四『東京の人』123)

例3の例文で使われた「どうも」は「ようだ」と呼応して、「白馬」に乗っている人に対して、表現主体の推量を表現している。この例文と同じように、例4の「どうも」も「ようだ」と呼応して、「俊三」のネクタイに「曲つてゐる」と、「敬子」の感じを表わしている。この場合の「どうも」と「ようだ」は表現主体の感覚を表現するものであるとともに、軽い推量判断の表現でもあろう。

「ゝらしい」(全部で二一例)

5 (略)。それで、私のテニススコット使ひも、今頃はお手元に届いてゐるかと思ひますが、そのなかに私は、慶子さんのテニスをあなたに見せたいと、確か書きましたね。しかし、それは肉眼によつてであるか。心の眼によつてであるか。現実の眼によつてであるか。想像の眼によつてであるか。今考へてみれば、どうも後者であるらしいのです。(五『父母』538)

6 「僕も、ひとり旅かしらと思つて、見てゐるんだ。お隣の人が、お父さんだらうと思つたんだが、どうもさうぢやないらしいね。」

「お父さんぢやありませんわ。」(七『燕の童女』110)
例3、例4と同じように、例5、例6で使われた「どうも」は「らしい」と呼応して、表現主体(あるいは話し手)の軽い推量判断を表わしている。例5では、表現主体(「私」)の考え込んだ結果によつて、「後者である」という推し量りを表現している。例6では、話し手(「僕」)が現場で見えて、「さう(お父さん)ぢやない」考えを推量判断のかたちで示したものである。

「さうだ」(全部で四例)
7 洋子の言ひ方が余りに真剣なので、三千子は、その贈物といふのが、急に心配になつて来た。
どうも、ただの贈物ではなささうだ。

リボンや、チヨコレトや人形ではなささうだ。なんだらう、いつたい？(二十『乙女の港』166)

例7の「どうも」は「さうだ」と呼応して、「贈物」に対する「三千子」の軽い推量判断を表わしている。

また、次のような例もある。

「さでしょう」「さだらう」(全部で三例)

8 白百八と左上隅の黒を睨まれたので、七段は黒百九、黒百十と守つて、完全生きた。この隅の黒の形は、白か

ら打ち込んで来られると、死か却か、詰め碁の問題のやうに、多種多様の変化がむづかしいところだつた。

「どうも、この隅に手を入れとかないといけないでせうな。長い間の借金ですから。借金には、えらい利子がつきますから。」と、黒百九の封じ手を開いた時に、大竹七段は言つた。(十一『名人』549)

9 「……。間もなく、警察があつた三階建の建物を調べたらしいし、現に僕は短銃を撃つた男だつて知つてゐるんだよ。自殺未遂と本人は云つてゐたが、どうも女を殺すつもりだつたらうと、僕は睨んだがね。なんでも、時田とかいふ男だつた。」(二十一『秘密の秘密』487)

例8、例9の例文で使われた「どうも」も話し手の軽い推量判断を表わしている。それぞれ後に来る「でせう」「だつたらう」と呼応して、話し手の主観的な推し量りを示していると云つていいだらう。

一・二 呼応する表現のない例文

「さ形容詞(形容動詞)」(全部で一八例)

10 植木さんが悲しさうにおつしやつたわけではなかつた。無邪気な調子だつた。御自身が御自身が合点ゆかぬやうな風で、「どうもをかしいね。死ぬやうな気が、なにもせんぢや

ないか。星がたんと光つてやがら。」

「さうよ、さうよ。」と、私は追ひすがるやうに言った。胸がふるへた。(七『生命の樹』337)

11 「君には、僕といふ監督か番頭が、どうも必要だね。」と、小山は朝子が一人で、新劇の小さい公演に出たことも、ひどく不服のやうだつた。(十五『東京の人』292)

例10の場合、「をかしい」という話し手自身の考え方に対して、「どうも」を付け加えたことよって、一種の煮え切らない疑念の入った個人的な感情も与えているようである。例11の例文では、「必要だ」という話し手自身の判断に対して、「どうも」で推量の判断として表出している。

「一〇」(全部で九八例)

12 「おい妻いのがゐたぜ、中に持ち込んでから、まだ筆を入れてるやつがあつたぜ。」「ほう、さういふことが許されるなら、僕も行つて来ようかな。どうも気になるところがあるんだ。」(四『絵の匂ひから』446)

13 竹内はネクタイを結びながら、「例の浴衣の旅行は、行つてもらふことにしたよ。少しどうも、品の悪い仕事だがね。」「なんだつて、勉強ですわ。真面目に踊りさへすればいいんですわ。遮二無二働きますわ。」(六『花のワルツ』56)

例12・例13の例文では、「どうも」が直接に述語にかかつていて、呼応する表現のないものである。この場合、文末に

は、いわゆる断定判断を表わす「だ」が使われているけれど、「どうも」の働きによって、推量判断の表現になる。

例えば、例12では、「気になるところがあるんだ」という話し手自身の判断に対して、「どうも」で推量判断の表現として表出するものと言つていいだろう。

一・三 まとめ

以上の分析をまとめると、次の二つの表が出来るだろう。

呼応する表現	例数	百分率
ゝ気がする	4	2.56
ゝようだ	9	5.76
ゝらしい	21	13.46
ゝそうだ	4	2.56
ゝでしよう ゝだったろう	3	1.92
ゝ〇(形容詞)	17	10.89
ゝ〇	98	62.82

意味	感じ	軽い推量判断	感情
呼応する表現	気がする	〇 「ようだ、らしい」「そうだ、しでしよう	〇 (形容詞)
例	1 2	8 3 9 4 11 5 12 6 13 7	10

以上の集計結果から、次の二つの特徴があげられるだろう。
 ① 「どうも」が使われた文の中で、呼応する表現のない例文は最も多かった。全部で一五例あって、例文全体の七三・七一%を占めている。

② 呼応する表現の中では、「らしい」が最も多用されている。二一例あって、例文全体の一三・四六%を占めている。これに対して、「気がする」「そうだ」の例文は少なく、どれでも四例しか出て来なかった。

前述の特徴から見れば、「どうも」は呼応する表現を求めた力はあまり強くないものだと言えるだろう。また、呼応する表現の中で、「らしい」が最も多用されているから、「どうも」とは、意味的に最も近いものと見ていいだろう。

二、「どうやら」

「どうやら」が使われた例文は全部で五十ある。呼応する表現の違いによって分類すると、以下のようである。

二・一 「ようだ」「どうやら」と呼応する表現

「ようだ」(全部で二例)

14 遺族の会議には**いづれ**その話も出るだろうが、その議決に

常子がしたがふかどうかは別問題である。もし遺族の意に反しても生みたいなら、最悪の場合、縁談の時の戸田の言葉のやうに、ほかの男の子供だと言ふ手もある。あの結婚前の戸田の言葉が、どうやら遺言のやうでもある。とにかく今は、六十七と言ふ夫の死のとりこみのなかで、三十三の妻の流産は醜悪と見られさうな羞恥が先立つて、常子はシヨックをこらへ、身をいたはつてゐた。(八『多年生』386)

15 戦争に**いためられた**支那の子供などを**いたはる**やうな仕事にきつと引き出されるでせうと私は言ひ、恵子さんはただもう小さい家庭に引きこもつてゐたいといふことで、お台所などにごまかい心づかひをして暮らすのが好きなひとでもありませんが、一年ばかりしてお産に日本へ帰り大きいおなかでたづねて来てくれた時の話では、どうやら新世帯のうちにかくれて

世間へは出ないですませたやうでしたけれども、広東でしたか上海でしたかで汪精衛の令嬢の日本語教師をさせられてゐたさうでありました。(二十二『感傷の塔』146)

例14で使われた「どうやら」は「ようだ」と呼応して、比喻のような働きをしている。例15の例文では、「どうやら」は「ようだ」と呼応して、「恵子さん」のことに對して、話し手の推量の判断(過去)を表わしている。

「らしい」(全部で二五例)

16 洋服は秋のもの。だが、よく見ると、どうやら下着が揃つてゐないらしい、さうだ、靴下なしの素足。くるぶしのあたりに、白いアンクル・ソックスが、子供のやうで、これはいかにも夏。(四『浅草の姉妹』252)

17 「どちらが死んだのかしら。」と、鳥籠をしげしげ見てゐたが、予期とは逆に、生き残つたのは、どうやら古い雌であるらしかった。一昨日来た雌よりも、しばらく飼ひなじんだ雌の方に愛着がある。(五『禽獸』163)

例16、例17で、表現主体は「よく見る」「しげしげ見てゐる」という行動をして、そこで、「下着が揃つてゐない」「生き残つたのは古い雌である」という判断を下した。この場合、「どうやら」は「らしい」と呼応して、表現主体の推量判断を表現している。

「しそうだ」(全部で五例)

18 その人達が縁がかりの嫁捜しは、有名なものだった。伯爵には、縁談が降るやうにあつたと云へぬこともない。礼子もこの連中の寶探しに発見された、寶の一つだった。「この令嬢なら、伯爵もどうやら治まりさうです。」と、一人が云うと、相手は胸を撫でおろす風に、「それはなにより結構です。さういふ人が見つかりましたか。」(九『女性開眼』139)

19 杉村の言ひたいのは、玉堂にとつての琴は自分にとつては、なににあたるのだらうかといふことだつた。玉堂の琴は自分にもあるのだらうか。

どうやらなささうである。

杉村はまた絵のない床を眺めた。(二十二『琴を抱いて』224)

例16、例17と同じように、例18、例19の「どうやら」は「しそうだ」と呼応して、話し手(あるいは表現主体)の推量判断を表わしている。

二、二 呼応する表現のない例文

次は呼応する表現のない例文を見てみよう。

「し〇」(全部で一八例)

20 「でも私、実はちよつと安心しましたのよ。そんなこ

とを言ふところをみると、あの子もどうやら今日まで、
まちがひなしに来たんですわね。だつて、さうでせう？」

「ふうん。」(八『再婚者』55)

21 子供づれの女が横を向いたので、うしろに立つてゐる福子にわかつたのだが、福子の家の近くの細君だつた。細君には男のつれがあつた。列は二人づつならんでゐる。細君は横の男の耳に口を近づけて、「学校のお友だちよ。」とささやくのが、どうやら福子にも聞き取れた。

男はつれの女が呼ばれた時に、ふつとそつぽを向いた。
(八『小春日』270)

22 「ますますお盛んで、ほんとに結構ね。」

「まあ、おかげさまで、どうやら……。」

「七階のばら展を見て来ました。」

「きれいでせう。ここでも、花つくりをしますから、
ときどきどうぞ……。」(十四『東京の人』104)

以上の三つの例文を見て分かるように、「どうやら」が表す意味には、次のように分けることが出来るだろう。まず例えば、例20の例文では、「どうやら」は話し手の「あの子」のことに對する推量判断を表わしている。また、例22では、相手の誉める言葉を受けて、自分の商売がまがりなりにうまく行っていると話し手自身(「鏡子」)の判断を表わしている。ちよつとほつとした気持ちも入っているようである。

二・三 まとめ

以上の分析をまとめて次の二つの表が出来るだろう。

呼応する表現	例数	百分率
ようだ	2	4
らしい	25	50
そうだ	5	10
〇	18	36

意味	比喩	軽い推量判断	事態がまがりなりに成立した様子
例	14	18 15 19 16 20 17	21 22
呼応する表現	ようだ	ようだ らしい そうだ 〇	〇

この集計から、次の特徴があげられるだろう。

① 呼応する表現のない例文は18例あって、全体の三六%を占めている。

② 呼応する表現の中で、「らしい」が最も多用されている。

る。全部で25例あって、全体の半分を占めている。それからは「そうだ」「ようだ」の順となっている。

呼応する表現のある例文は全体の六四％にもほつているという集計結果から見れば、「どうやら」は呼応する表現を求める力がやや強いと見ていいだろう。それから、呼応する表現の中で、「らしい」が最も多用されていることから、「どうやら」とは意味的に最も近い表現だと言えるだろう。

三 「なんとなく」

「なんとなく」が使われた例文は全部で二八六例ある。呼応する表現の違いによって分類をすると、以下のようである。

三・一 「なんとなく」と呼応する表現

「し気がする」(全部で五例)

23 「さうでもございませぬ。」

弘子は兄から話を聞いて、なんとなく小泉が背の高い、色の白い男のやうな気がしてゐた。しかし、小泉は背に少し円みを持つて、首が前に出てゐる感じで、小柄の弘子が見上げるほどではなかつた。(『白雪』127)

24 「ほんとね、卒業の年は、特別早く経つちやふつて言

ふけど、さうらしいわね。」

「なんとなく今から忙しいやうな気がして、落ちつかないわね。」

「修学旅行が楽しみだわね。」(二十『乙女の港』133)

例23では、「なんとなく」は後に来る「気がする」と呼応して、「小泉」という人に対する弘子の感覺のことを表現している。同じように、例24では、「なんとなく」は「気がする」と呼応して、話し手の「今から忙しい」という感じのことを表わしている。

「し気持ち」(全部で二例)

25 私のはつとしてアルバムを閉ぢた。梯子を登つて、書棚の上にかへした。なんとなく書庫のなかに落ちついてゐにくい気持ちになつた。追はれるやうに外に出た。

(六『百日堂先生』172)

例25では、「落ちついてゐにくい」という「私」の内的感覺を「なんとなく」と「気持ち」で表現している。

「し感じ」「しを感じる」(全部で一七例)

26 杉山は帰省で、清野と小泉と私とである。なんとなく空気が柔らいである感じだ。杉山には例の悪癖の臭気がついて廻つてゐるせるか、どうも好きになれない。

(十『少年』211)

27 百子は首を洗ひながら、竹宮少年が金の首輪を取つて行つたことに、なんとなく喜びを感じた。(十一『虹い

くたび』175)

例26では、「なんとなく」は「感じた」と呼応して、寄宿舎に在る「私」の周りに対する感覚のことを表現している。

これと同じように、例27の「なんとなく」は「感じた」と呼応して、「百子」の喜びの感覚のことを表わしている。

以上で、「なんとなく」と呼応する「気がする」「気持ち」「感じ」などの表現をまとめて言うと、これらは話し手(あるいは表現主体)の何かに対する直感を表現するものだと言っていだらう。

また、次のようなタイプの表現もある。

「ようだ」(全部で七例)

28 神社の公孫樹の大木も、まだ芽吹いてはあないが、朝の日光と朝の鼻には、なんとなく木の芽の匂ひがするやうだ。(十二『山の音』385)

29 妻と二人で落ちついたが、なんとなく落莫としてさびしいやうだった。民子を置いて来たからかもしれないなかつた。(二十三『天授の子』596)

例28では、「なんとなく」は「ようだ」と呼応して、表現主体の感じを表現しているけれど、軽い推量判断でもあるようである。この例文と同じように、例29の「なんとなく」も表現主体(「私」)の感じを表現している。そこで、漠然とした感じも入っているようで、軽い推量判断を表わすものでもあろう。

「よそうだ」(全部で四例)

30 それを聞くと、綾子は淋しげに笑った。

そして、なんとなく心苦しげに、うつむいてしまった。なほみは、どうしてかと思つて、綾子を励ますやうに、(後略)。(二十『花日記』241)

例30では、「なんとなく」は「そうだ」と呼応して、「綾子」の様子に対する「なほみ」の推量判断を表現している。

三・二 呼応する表現のない例文

呼応する表現のない例文の中で、「なんとなく」は述語として使われた形容詞・いわゆる形容動詞にかかるものは31例ある。

「よ〇(形容詞)」(全部で三一例)

31 東京の家に帰ると、私は真直ぐに妻の病院へ行つた。

子供達は代る代る面を被つてにぎやかに笑つた。私はなんとなく満足だつた。(一『笑はぬ男』269)

32 しかし、そんな観察をするといふのも、有田に対する自分の気持ちのせめだと思ふと、礼子は腹が立つて来るやうで、そしてなんとなく楽しかつた。(九『女性開眼』307)

33 「お客はたいい旅の人なんですもの。私なんかまだ子供ですけど、いろんな人の話を聞いてみても、なんとなく好きで、その時は好きだとも言はなかつた人の方が、いつまでもなつかしいのね……。」(十『雪国』23)

例31では、「なんとなく」は表現主体の「私」が周りの状況（子供達のこと）に触発されて出て来た「満足」の気持を表現している。「なんとなく」は表現主体の内的感情（例32では「楽しい」、例33では「好き」）を表現する前に来て、一種の無意識の感覚を示しているようである。

「〽〽」全部で二一八例）

34 竹原は波子にじやれてゐる。さういふ疑ひが、波子にはなんとなくあつて、心のずれを感じさせた。

（十『舞姫』485）

35 敬子は昭男の病院へ、電話をかけた。

昨夜、あんな風に別れてしまつた。わびをいふためだが、なんとなく、昭男の声を聞いてみたいのだった。

（十四『東京の人』393）

36 「あたしのこつちへ帰つたのが、どうして先生、おわかりになつたのかしら？」

「なんとなくね。」

「さう？先生はおやさしいんですわ。」（十四『東京の人』601）

37 縁側を下りると、もう一度先生のたたずまひを見返つた。なんとなく陰気な粗末な家だつた。きつと胸がつまる感じだつた。（十九『倉木先生の葬式』404）

38 三千子がしよんぼり雨を見てみると、うしろから、な

んとなくいい匂ひがした。そして、名を呼ばれた。（二
十『乙女の港』22）

39 しかし、後から来る人の列に、花子は押し流されてしまつた。お母さまも、人の群や駅の建物を、なんとなく見まはした。（二十『美しい旅』647）

40 人間がものを言ふ時の口が、かうまで美しいとは、今では思ひ及ばぬことだつた。

上杉はなんとなくうなだれて、料理の味もわからなかつた。（二十三『旅への誘ひ』305）

以上の例文から見れば、たいてい次のようないくつかの種類に分けることが出来ると思われる。例えば、

なんとなくあつて、〽（例34）

なんとなく陰気な粗末な家だつた（例37）

なんとなくいい匂ひがした（例38）

のような例文の場合、「なんとなく」は話し手（あるいは表現主体）の感触を表わしている。また、

なんとなく見まはした（例39）

なんとなくうなだれて、〽（例40）

のような場合、「なんとなく」は、表現主体がはっきりした目的・意識がないまま「見まはす」「うなだれる」という行動をする様子であることを表現しているようである。

それから、

なんとなく、昭男の声を聞いてみたいのだった(例35)のような場合、「なんとなく」は願望を表わす「〜たい」にかかるものだとと言えるであろう。

三・三 まとめ

以上で、「なんとなく」に対する分析をまとめて表にする
と、次のようであろう。

呼応する表現	例数	百分率
〜気がする	5	1.74
〜気持ち	2	0.69
〜感じ	17	5.94
〜ようだ	7	2.44
〜そうだ	4	1.39
〜〇 (形容詞)	30	10.48
〜〇	221	77.27

例	呼応する表現	意味
36, 26, 23, 24, 25 37, 27, 34, 28, 29, 30 38	〜気がする 〜気持ち 〜感じ 〜〇	感じ
28, 29, 30	〜ようだ 〜そうだ	軽い推量判断
33 32 31	〜〇 (形容詞)	感情
35	〜たい 〜〇	願望
40 39	〜〇	様子

この集計結果から、次のような特徴があげられるだろう。

① 「なんとなく」が使われた文の中では、呼応する表現のない例文は圧倒的に多かった。形容詞を述語として使われた例文も含めて、二五一例あって、例文全体の八七・七六%を占めている。

② 呼応する表現の中で、「気がする」「気持ち」「感じ」など、表現主体の感触を表わすものがやや多かった。いわゆる助動詞の中で、「ようだ」はやや多かった。呼応する表現のないものは圧倒的に多かった、ということから見れば、「なんとなく」は独自でその役割を果たし、呼応する表現から補足・強調を求める力はあまりないものだと見ていいだろう。それから、呼応する表現の中で、「気がする」「感じ」「ようだ」などの使用はやや多かった、という事実から見ると、「なんとなく」が表わす表現主体の気持ちは自身

以上の集計をまとめ、「どうも」「どうやら」「なんとなく」については、次のような特徴があげられるだろう。

① 呼応する表現について、「らしい」が最も多用されている、ということ。「どうも」と「どうやら」の共通したところと言える。これと同時に、「気がする」「気持ち」「感じ」など、使用率は少ないかまたは使われていない、という傾向もある。

② 「どうも」「どうやら」と違って、「なんとなく」と呼応するものの中で、「らしい」はなくて、「感じ」「気がする」はやや多かった。

③ 使われた呼応する表現の種類については、「なんとなく」と「どうも」はやや多くて、「どうやら」は少なかった。「どうやら」が表わす意味の幅はやや狭いと思えていいだろう。

④ 呼応する表現のない例文の割合については、「なんとなく」は最も高く、次は「どうも」「どうやら」の順となっている。これは呼応する表現を求める力が強い、強くないか、ということを示していると思われる。つまり、割合の最も低い「どうやら」は、この三つの副詞の中で、呼応する表現を求める力が最も強い、と見ていいだろう。これに対して、「なんとなく」は最も弱く、呼応する表現のない例文の占める割合は高かった。

以上で、『川端康成全集』をテキストとして、「どうも」「どうやら」「なんとなく」、これら三つの副詞とその呼応する表現との係わりについて、とりわけその呼応する表現の特徴、呼応する表現を求める力の強弱、今回の調査と考察を通して、一応一段階としての結論が得られたと思われる。共通するところのある他の陳述の副詞をもっと多く考察の対象に入れて、比較を行なって、これらの副詞といわゆる陳述の段階との対応関係はもっとはっきり見られるはずだと思うので、これを今後の課題としたい。

(注1) 最後に、従来副詞の用法として挙げられて来たものの中で、今日なは問題とされてゐるものは、いはゆる陳述の副詞と云はれてゐるものである。例へば

明日は恐らく晴天だらう。

彼はあのことを決して忘れない。

もし君が行けば、僕も行く。

右の傍線のある「恐らく」「決して」「もし」は、それぞれ「だらう」「ない」そして「行け」の零記号の陳述に「ば」を伴った仮定的陳述を修飾してゐるところから、陳述副詞と一般に云はれてゐる。今まで述べて来た副詞の諸例は、そのすべてが、詞に關係するのであるが、ここに挙げた陳述副詞は、辞を修飾するのであるから、副詞の用法としては、極めて異例に属するものと云はなければならない。(日本文法 口語篇 122頁)

(注2) 「叙述の文節としてはたらくものは、動詞と、存在詞と、いわゆる形容詞の第三の段階と、『名詞十だ』の第三の段階と、そしていわゆる形容詞の第一の段階であると考えられるようであった。これらの、叙述の文節としてはたらくものには、いわゆる形容詞の第一の段階を除いて、叙述の文節としてはたらくものである叙述の段階と、その叙述の段階としてのはたらくきを完成する段階である陳述の段階と、二つの段階があると考えられるようであった。ここで、まず見逃せないことは、陳述の段階は、動詞、存在詞、形容詞句、名詞句が、いわゆる助動詞を伴うにしろ、伴わないにしろ、すでに叙述の文節としてあるところに、さらに加わる段階であるということである。」(『国語表現法研究』328頁)